

国語

(六〇分) 答えはすべて解答用紙に書き入れること。

一 次 の 文 章 を 読 ん で、あ と の 問 い に 答 え な さ い。

本との付き合いも人間との付き合いに似ているように思われる。

はじめは仲よくしてやがて意見が合わなくて別れ別れになる——そういうことが読書にも交友にもおこる。友人との付き合いはともかく、本までまったくこちらの意見をさしはさむ余地のないということとは珍しい。どんなにおもしろいものでも、どこかに不満がおこる。その点を押していつて自説をテンカイすれば、そこに批判、批評が生まれる。この場合はどうしても、本を否定する立場をとらなくてはならない。批判はしたがって否定的創造活動ということになる。新しいものを生み出すひとつの方法ではある。ただ、何となく喧嘩腰で本を読んでいるのは哀れな気がする。

もうひとつの本との付き合いは、どこまでも書いてあることを信用し、おとなしくいわれるがままについていくやり方である。欠陥があるのではないか、間違ったところはないかと目を光らせているのではなく、大体においてすべてを肯定してかかる読み方である。すぐれた教科書に対する態度はこれに近い。教科書を疑っているのは知識を身につけるのに妨げとなる。下手な懷疑をしないですつぱり受け入れる。それが抵抗なくできる人が優等生といわれるのだ。

優等生は²ジュウジュンであるから書いてあることはよく頭に入る。知識にはなるが、新しいものを生み出すきっかけをとらえることはかえって難しい。試験の成績ではすぐれている学生が、論文やレポートを書く^①何ともいえない妙なものになるのは、グライダーとして優秀であつても、自力で飛ぶのはまた別であることを示している。

学校の教育は本により添い、そのいおうとするところを正しく解することを目標に行なわれるから、いわゆる優等生が生まれ、それがもつとも望ましい学習者であるという常識が確立する。もちろん、何もわからずに理屈だけこねまわすのは危険である。まず、必要な知識を身につけよと学校が要求するのは I。ただ、知識習得ということがなかなか簡単にはこばないで、長い期間を要する。そのうちに、³ジュウウ一方の姿勢が固定してしまう。本を読んでいるうちに、II ようになる。

第三の道は、おもしろい本とすこし付き合い、おもしろくてたまらなくなりそうところで、あえて、その本と別れる方法である。もちろんこれでは知識を得ることはできない相談である。その代り、自然に新しい考えをもつことは可能である。それに比べる、中絶読書なら批判によらずして、^②わが道を行かれる。

運動している物体は、外からの作用を受けないかぎり、その運動を続けようとする性質をもっている。動いているものが急に停止すると、それまで動いていた方向へのめり込み^④もうとする。電車が急停車すると、乗客が将棋倒しになるのもこの性質による。慣性の作用である。

物体に認められるこの慣性の法則は心理現象にも⁴テキヨウでできるように思われる。親しいものが傍からいなくなつて感じる、淋しさの感情も、慣性が挫折させられたところで意識されるものと解釈できる。

本を読むときにも慣性をはたっている。本のはじめの部分は多少とも読みにくい^⑤が、なれるにつれて、やがてだんだん読みやすく、すらすら進むようになる。途中でやめるのが惜しくて先を読みたいとも思う。脱兎の勢いで終りの部分を読んじまうと、あとに余韻が生じる。もつとも⁵ダイキボな慣性の現象といつてよい。心理的には本を追おうとしているのに、本はもう終つてしまっている。対象を失った読者の心理はこれまで進んできた方向の延長線上を走る。そうして起るのが余韻で、ことに文学作品において顕著であるが、文学に限るものではない。^③すぐれた書物は読み終えたとき何らかの残影をもつのが普通である。

中絶読書は、読み切らないで、おもしろくなりそうところで、つまり、スピードが出たところで、本から離れ、そこに生じる III を利して自分の考えを浮び上げようとすることにほかならない。芸術作品なら全部を読み通したうえでの余韻でなくては困るが、知的な文章では最後まで付き合い合つては、あまりに多く影響を受けすぎることになる。そういう読書もある。本はきつかけになればよいし、走り出させてくれればそれでりつばな働きをしたことになる、そういう読書もある。

おもしろすぎて先を読むのがこわくなるような本がときどきあるというのは、途中で切つて、そこに創造的な慣性の作用を起すことを、われわれが心のどこかで期待しているからかもしれない。

(外山滋比古『知的創造のヒント』より・一部改変)

(注1) 喧嘩腰 …… 喧嘩をしかけるような態度。

(注2) 懐疑 …… 疑いを持つこと。

(注3) 脱兎の勢い …… 非常に速いことのとえ。

(注4) 残影 …… 心に残る姿や様子。

国 語

問一 部1～5のカタカナを、それぞれ漢字に直しなさい。(丁寧^{ていねい}に書くこと)

問二 部①「何ともいえない妙なものになる」とは、どういうことを言おうとしたものですか。わかりやすく六十字以内で説明しなさい。

問三 I II に当てはまる最もふさわしい言葉を次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

- I ア 無理がある イ 危険である ウ 誤ってはいない エ 押しつけがましい
オ 許されることではない
- II ア 本に読まれる イ 本にだまされる ウ 本が読めなくなる エ 本が嫌^{いや}になってくる
オ 本が語りかけてくる

問四 部②「わが道を行かれる」とは、どういうことですか。わかりやすく九十字以内で説明しなさい。

問五 III に当てはまる最もふさわしい語を、本文中より抜き出しなさい。

問六 次の一文が入る最もふさわしい部分を探し、その直後の五字を抜き出して答えなさい。

【第一の方法のように本のいつていることを否定し、ときには破壊^{はかい}して、そのあとへ修正意見を出すのは、平和ではない。】

問七 本文の内容に当てはまるものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- A 否定的創造活動とはどんなおもしろい本にもある不満による批判から生まれてくるものであるが、最初から批判的にその本を読む態度は感心できない。
- I すべての肯定する本の読み方とは、間違っていることはないかと注意深く読んで、間違いがなければその内容を受け入れようとする態度のことである。
- ウ 本を読むときにその本がおもしろいと思うことで、心理的にも読むことに対し抵抗がなくなるため、最初から勢いがつき最後まで一気に読めるようになる。
- エ 知的な文章を最後まで読んでしまうと、その影響を強く受けてしまいおもしろくないが、中絶読書はきっかけを作り出す優れた読み方の一つである。
- オ おもしろすぎる本を意識的に読むのをやめてしまうのは、その本の影響を強く受けてしまい、他の世界に目が向かなくなることを恐^{おそ}れるからである。

問八 この文章は、『知的創造のヒント』の一部を抜き出したものです。この文章の内容にふさわしい「題名」を、十～十五字以内で自分で考えてつけなさい。

国語

二

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

先生の仕事を手伝い、少しおくれて学校を出ると、一番大きな桜の木の下で、同級生が十人ほどかたまって何かひそひそと話していた。信夫が近づくと、みんなはちよつと顔を見合せてから、信夫のために場所をひらいた。

「何かあったの」

「知らないのか？ 高等科の便所に女の髪の毛があつたんだって。そして血がいっぱい落ちているんだって」
重大そうに答えたのはクラス一のガキ大将松井である。

「知らないな」

「そしてな、夜、女の泣き声聞きこえるんだとよ。おばけが出るんじゃないかな」

副級長の大竹が（a）つけくわえた。

「いったいだれがその泣き声をきいたのさ」

信夫はおちついていった。

「知らん。知らんけれどほんとうらしいよ。なあ」

松井がみんなの顔をみた。みんな一斉にまじめな顔でうなずいた。信夫は（b）笑った。

「うそだよ、そんなこと」

「うそだって、どうして永野にわかるんだ？ みんなはほんとうにおばけが出るっていつてるんだぞ」

松井の言葉に、そうだ、そうだというように、生徒たちはうなずいた。信夫は少し困ったが、いい返した。

「だって、おばけなんかいないって、おとうさまがいつていたもの」

「うちのとうさんは、おばけをみたことがあるって」

「うん、うちでも、おばけはほんとうにいるって、いつでもいうよ」

みんな、いるいると口々にいった。たしかにおとも幽霊やおばけの存在を信じる者が多かった。

「そんなものはいないよ」

信夫はダンコとしていった。

「そうかい。じゃ、ほんとうにおばけが出るかどうか、今夜八時にこの木の下に集まることにしないか」

松井がいった。みんなおしだまってしまった。そつとどこかに行くふりをして離れた者もいた。

「どうする？ 集まらないのか？」

松井が返事をうながした。風が吹いて、うつむいている男の子供たちの上に、桜の花びらが降りしきった。

「みんなで集まるんだから、こわくはないぜ」

「そうだ。みんなで夜集まるのはおもしろいぞ」

副級長の大竹が、ガキ大将の言葉にサンセイした。

「永野はくるだろうな」

松井は逃がさないぞという顔をした。

「くるよ。今夜八時にここに集まるのだな」

信夫は級長らしい落ちつきをみせてうなずいた。

「よし。じゃ、みんなもくるだろうな。どんなことがあってもな」

松井はそういつて一同をみまわした。みんな口々に「うん」といった。

夕食の時間になって、雨がぼつぼつ降りだしていたが、七時をすぎたころには、雨に風をまじえていた。

「おかあさま、早くこれから学校に行ってもいい？」

① さつきから、暗い外をながめていた信夫がいった。

「まあ、これから学校にどんな用事がありますの」

菊はおどろいて、信夫をみた。

「つまらないことなんだけれど……。そうだ。行ってもつまらないことだから、やめようかな」

国語

信夫はふたたび外をみた。雨の音が³ハゲしかった。

「何かあるのか」

新聞を見ていた貞行が顔をあげた。

「高等科の便所に夜になると女の泣き声がするんだって。みんなで今夜集まって、それがおばけかどうかみるんだって」

「まあ、おばけなんて、この世にいるわけがありませんよ。そんなことで、こんな雨ふりに出かけることはありませんよ。ねえ、あな」

菊はおかしそうに笑った。貞行は腕を組んだまま、少しむずかしい顔をしていた。

「ええ、よく、いかないよ。こんなに雨が降ってきたらだれも集まらないのに決っているから」

「そうか。やめるのはいいが、信夫はいつたい、みんなとどんな約束をしたんだね」

「今夜、八時に桜の木の下に集まるって」

「そう約束したんだね。約束したが、やめるのかね」

貞行は（c）信夫をみつめた。

「約束したことはしたけれど、行かなくてもいいんです。おばけがいるかどうかなんて、つまらないから」

こんな雨の中を出ていかなければならないほど、大事なことはないと思夫は考えた。

「信夫、行っておいで」

貞行が（d）いった。

「はい。……でも、こんなに雨が降っているんだもの」

「②そうか。雨が降ったら行かなくてもいいという約束だったのか」

貞行の声がきびしかった。

「いいえ。雨が降った時はどうするか決めていなかったの」

信夫はおずおずと貞行をみた。

「約束を破るのは、犬猫に劣るものだよ。犬や猫は約束などしないから、破りようもない。人間よりかしこいようなものだ」

（だけど、大した約束でもないのに）

信夫は不満そうに口をとがらせた。

「信夫。守らなくてもいい約束なら、はじめからしないことだな」

信夫の心を見通すように貞行はいった。

「はい」

しぶしぶと信夫はたちあがった。

「わたくしもいっしょにまいります」

菊も立ちあがった。

「菊。信夫は四年生の男子だ。ひとりで行けないことはあるまい」

学校までは四、五丁ある。菊は（e）貞行をみた。

外に出て、何歩も歩かぬうちに、信夫はたちまち雨でずぶ濡れになってしまった。まっくらな道を、信夫は爪先でさぐるように歩いていった。思ったほど風はひどくはないが、それでも雨に濡れた、まっくらな道は歩きづらい。四年間歩きなれた道ではあつても、ひるの道とは全く⁴カッテがちがった。

（つまらない約束をするんじゃないやなかった）

信夫はいくども後悔していた。

（どうせだれもきているわけではないのに）

信夫は貞行の仕打ちが不満だった。ぬかるみに足をとられて、信夫はなかなか歩けないでいた。春の雨とはいいいながら、ずぶ濡れになった体が冷えてきた。

（約束というものは、こんなにまでして守らなければならないものだろうか）

わずか四、五丁の道が、何十丁もの道のりに思われて、^③信夫は泣きたくなった。

国語

やっと校庭にたどりついたところは、さいわい雨が小降りになっていた。暗い校庭はしんとすまりかえって、何の音もしない。だれかきいているかと耳をすましたが話し声はなかった。ほんとうにどこからか女のすすり泣く声がきこえてくるような⁵ブキミ⁵なはずけさだった。集合場所である桜の木の下に近づくと、

「誰だ」

と、(f) 声がかかった。信夫はぎくりとした。

「永野だ」

「何だ、信夫か」

信夫の前の席に並んでいる吉川修^{よしかわさむ}の声だった。吉川はふだん目だたないが、落ちついて学力のある生徒だった。

「ああ、吉川か。ひどい雨なのによくきたな」

だれもくるはずがないと決めていただけに、信夫はおどろいた。

「だって約束だからな」

^B淡々^{たんたん}とした吉川の言葉が大人っぽくひびいた。

(約束だからな)

信夫は吉川の言葉を心の中でつぶやいてみた。するとふしぎなことに、「約束」という言葉の持つ、ずしりとした重さが、信夫にもわかったような気がした。

(ほくはおとうさまに行けといわれたから、仕方なくきたのだ。約束だからきたのではない)

信夫は急にはずかしくなった。吉川修が一段えらい人間に思われた。日ごろ、 としての誇り^{ほこり}を持っていたことが、ひどくつまらなく思われた。

「みんな、こないじゃないか」

信夫はいった。

「うん」

「どんなことがあっても集まるって約束したのにな」

信夫はもう、自分は約束を守ってここにきたような気になっていた。

「雨降りだから、仕方がないよ」

吉川がいった。その声に俺^{おれ}は約束を守ったぞというひびきがなかった。⁴信夫は吉川をほんとうにえらいと思った。

(三浦綾子『塩狩峠』より・一部改変)

(注1) 高等科 … 現在の中学校に相当する。

(注2) 丁 … 一丁は約十九メートル。

問一 部1～5のカタカナを、それぞれ漢字に直しなさい。(丁寧^{ていねい}に書くこと)

問二 部A・Bの語句の意味として最もふさわしいものを次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

A「おずおずと」 ア ためらう様子 イ まじめな様子 ウ ひかえめな様子 エ あきれる様子

オ つまらない様子

B「淡々とした」 ア ずっしりとした イ しつかりとした ウ すっきりとした エ おっとりとした

オ さっぱりとした

問三 (a) () (f) に当てはまる最もふさわしい言葉を次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。ただし、同じ記号を二回以上用いてはいけません。

ア ふいに イ おだやかに ウ ばかばかしそうに エ 困ったように オ 恐ろし^{おそ}そうに カ じつと

国 語

問四 ―― 部①「さつきから、暗い外をながめていた信夫がいった」とありますが、この時の「信夫」の気持ちとして最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 悪天候の中、学校へ行く約束を守る者はだれもないと予想できるので、一人で学校へ行くことが不安な気持ち。
イ 雨が降った場合どういう手段で学校に行くかということを話し合わず、約束してしまったことを後悔する気持ち。
ウ 大雨の中、わざわざ学校へ行くほど重要な約束ではないので、行く必要はないと菊が言うことを期待する気持ち。
エ おばけにはもともと興味があつたが、おばけだけのために同級生たちと学校に行くことが面倒めんどうになっている気持ち。
オ 同級生たちと一緒にいっしょに楽しみにしていたおばけを探しに学校へ行きたいので、早く天気が良くなることを願う気持ち。

問五 ―― 部②「貞行の声がきびしかった」とありますが、この時の「貞行」の気持ちをわかりやすく五十字以内で説明しなさい。

問六 ―― 部③「信夫は泣きなくなった」とありますが、それはなぜだと考えられますか。その理由として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 同級生たちと夜に集まる約束をした信夫に対して、菊は強い雨が降っているので一緒に行くと言ってくれたのに、貞行の反対で一人で行くことになり腹が立ったから。
イ 強い雨が降っている中、同級生たちと夜に集まる約束を守るために家を出ると、目的地に行くまでにずぶ濡れになってしまい、体が冷え体調が悪くなったから。
ウ 大雨が降ってきて、同級生たちと夜に集まる約束を守らなくても良いという考えになったのに、貞行の反対にあい自分の思い通りにならなくなり悔くしかったから。
エ 同級生たちと夜に集まる約束を守ることを貞行に強いられ、しかも大雨の中ずぶ濡れで体が冷えてしまったことで、約束を守ることの意味が納得できなかったから。
オ 同級生たちと夜に集まる約束を守るように貞行に言われ家を出たが、大雨の降る中ずぶ濡れで体が冷え、しかも目的地までが遠く感じられやるせなくなったから。

問七 に当てはまる最もふさわしい語を、本文中より抜き出しなさい。

問八 ―― 部④「信夫は吉川をほんとうにえらいと思った」とありますが、それはなぜだと考えられますか。わかりやすく七十字以内で説明しなさい。

問九 本文の内容に当てはまるものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア はじめは高等科の便所におばけが出るという話に興味がなかった同級生たちは、おばけにくわしいガキ大将の松井の話によって、だんだんおばけに興味を持ち始め、夜に学校で集まる約束をしてしまった。
イ いつも信夫の味方をしてきた菊は、強い雨の中でも同級生たちとの約束を守るため一人で学校へ行けと貞行に言われた信夫のことがかわいそうに思ったので、信夫と一緒に約束の場所まで行こうと決心した。
ウ 同級生たちとの約束のことで貞行と言ひ合いになり家を飛び出した信夫は、家族から離れ一人で夜道を歩くことによって、冷静さを取り戻し、親である貞行の意見に反発したことを心から反省した。
エ 強い雨の中、同級生たちとの約束の場所まで一人で行った信夫は、そこに吉川がすでに一人でいたことに感心すると同時に、他のみんなが来ていないことを知り、約束を守った自分を立派だと思った。
オ 信夫は約束という言葉の重みを、家の中で貞行と会話をしている時は理解できなかったが、同級生たちとの約束を守り強い雨の中でも学校に来た吉川と会話をしている時によりよく理解することができた。

ここにシールをはってください。

国語 訂正

（一枚目）三十行目

誤 ^③すぐれた書物は読み終えたとき何らかの残影をもつのが普通である。
（注4）さんえい



正 ^{（注4）さんえい}すぐれた書物は読み終えたとき何らかの残影をもつのが普通である。

（五枚目）

誤 ^{（注2）}丁 …… 一丁は約十九メートル。



正 ^{（注2）}丁 …… 一丁は約一〇九メートル。